A Brief Note No. 184

発行日：２００７．９．６
発行人： Matsuo Masayasu

ロシア２都市の旅（2007 年７月１５日～７月２２日）

八千代市　　松尾　昌泰

モスクワ・サンクトペテルブルグは、ヨーロッパよりかなり近く、成田を発ったその日の夜に着く。この季節は白夜で、旅行日程は夜も組まれており、睡眠時間は短くなってしまった。それに加え後述するアクシデントで、今回の旅行は大変疲れた。

イサーク聖堂

血の上の教会

1、　ロシアの航空機アエロフロートと入国など

(1)　みみっちいロシア航空会社と外国人監視？

飛行機では、食事や飲み物のビールやワインを少しだけ頂くのも楽しみの 1 つだ。早速飲み物を注文したら、5 ドル（US$）だと言う。想像さえしてなかったので、一瞬ビックリした。「なんとみみっちい！」

ビザを取るときはロシア国内の行動を提出する必要があり、入国後はこの計画通りに宿泊ホテルなどに提出するらしい。ロシアへの旅行は自由になったというが、自由旅行など決してできない。ソ連時代の遺物のような制度「滞在登録」などで行動がチェックできるようになっているらしい。今回はツアー参加なので、これらは旅行業者や現地業者がやってくれたので、ノータッチだった。飛行機の中での入出国カードには、「観光目的」の他に、ロシア国内の誰が招待したのかを記入しただけだった。

最近では、テロなど犯罪への対応策として、これらの制度がより厳格にチェックされるようになったそうだ。

(2)　言葉による行動の不自由さ

モスクワ市中では、警察から提示を求められることがあるので、パスポートを携帯したが、たと

え、提示を求められても、言葉が分らないので、どうしようもないと思う。大きなホテルでは英語は通じるらしいが、ほとんどはロシア語しか通じない。（英語で話されても私は困るが）

ロシア語は、アルファベットも発音も異なり、アルファベットの中にはよく似た字もあり、また小文字・大文字ありと‥‥。地下鉄のルートや行き先、駅名などは、スペルを 1 字 1 字見比べながら確認するしかない。地下鉄に乗ってから、通過する停車駅名を確認するにも、駅名を書いている場所がまちまちで、しかも 1 字 1 字比較しながらの確認には時間が足りるわけがない。

ツアーの同行者の 1 人は、ガイドブック通り、乗車駅から駅数を数えて下車したら、1 つ先の駅だったそうだ。我々は、現地ガイドから、工事中の駅があり、その駅は通過すると聞いていたので、トラブルはなかったが、ツアーであっても自由行動はなかなか難しいものだ。

２、ロシアの治安

(1)　飛行機では

旅行業者から手荷物として「ガムテープ」を持参するように言われた。なぜだろうか、スーツケースが破損した場合に使うのだと想像していた。ところが、成田空港で、私たちのスーツケースの鍵の部分に、係員がガムテープをべたべたと、また、ぐるぐると貼り付けでしまった。アメリカへの飛行機便では、中を調べるために、スーツケースの鍵は掛けないことになっているので、不思議に思い質問したら、ロシアでは鍵を壊して中から抜き取るケースが時々あるとのこと。ロシア空港職員しか扱えないはずだと思うのだが・・・。勿論、ロシアの国内線でも、帰途の国際線でも、自分たちで持参したガムテープでぐるぐる巻きにした。

(2)　ホテルでも

ホテルのチェックアウトの時には、通常、宿泊の部屋の前にスーツケースを置き、ホテルの係員がロビーまで下ろしてくれる（バゲージダウン）が、サンクトペテルブルグのホテルでは、添乗員から「スーツケースは、部屋のドアの内側に置くように」との指示があった。スーツケース丸ごとの置き引きもあるそうだ！

ホテルの宿泊階の廊下には、ドアがあり、その階の宿泊者のキーがなければ、廊下にさえ入れないようになっていた。やはり物騒なのだ。

(3)　市内でも

どの国でも、旅行者が街を歩く時など、バッグや手荷物・ウエストポーチなど、気をつけなければならない。ロシアは治安が比較的良い方だと思っていたが、決してそうではない。サンクトペテルブルグもモスクワも、日本からだけでなく、欧州からの観光客も大変多い都市で、引ったくりやスリが横行している。添乗員からは「常に、バッグには必ず手を掛けておく」ように注意された。特に地下鉄は、プロのスリが集まっている場所で、それも数人が一組になっての犯行だそうだ。

(4)　ついに、地下鉄で狙われた！

同行したツアーでも、地下鉄で 2 件（未遂であったが）発生した。1 件はツアー2 日目の夜、ツアー同行者が地下鉄の電車に乗る時であった。もう 1 件は、ツアー3 日目の夜に発生。これは何と「私自身」だった。エスカレーターで地下に潜ってから地下鉄フロアーへのドアの所で起こった。3 人組で、ドアに先に 1 人が入り、私は入って行ったら、急に立ち止まり、後ろから 2 人がくっついて入れもしないドアに押してくる。4 人が狭い場所に詰め込まれた状態になり、そこで犯行が行われそうになった。この日は暑く、Ｔシャツ 1 枚になっていたので、丸見えのウエストポーチを狙われ

た。ドアで不自然な詰め込み状態に気をとられていると腰辺りにおかしな動きを感じ、「取るな！」と、勿論日本語で大声を張り上げた。私のウエストポーチは、ベルトのほかに補助の留め金がついていたので、未遂に終わった。パスポートや現金は入れてなかったが、もしパスポートを取られていたら大変なことになっていた。気分も悪く、また、他人事と思っていたので、かなりのショックを受けた。恐ろしい！

３、印象に残ったところ等

(1)　美しいサンクトペテルブルグ

3 泊したサンクトペテルブルは、確かに、建物、町並み、運河、そして全体的に統一感があり美しい都市だ。ヨーロッパで最も美しい街の１つとされているのは理解できる。皇帝や貴族の豪華な宮殿が並び、水路からみた町並みは素晴らしく、ロシア帝国の繁栄を語る豪華なエルミタージュ宮殿は世界一流の収蔵品を持つ美術館となっている。（世界の４大美術館の１つ）。また、上流社会で開花した宮殿芸術、オペラとバレエも盛んで、劇場は多いそうだが、中でもマリインスキー劇場、エルミタージュ劇場、リスキー・コルサコフ記念劇場、ムソルグスキー劇場の４つが有名だそうだ。

サンクトペテルブルグは、１８世紀ピョートル大帝はロシア近代化の夢を託して、ネヴァ川の沼地に国の威信をかけで創り始めた都市である。目指したのは、ヨーロッパへの窓を開き、後進国ロシアを近代国家へと脱皮させることだった。多くの人の犠牲を伴なって新都サンクトペテルブルグができた。

自由時間に、**ネヴァ川の「運河クルーズ」**を楽しんだ。沼地に運河を掘って作った町並みであるが、水辺から見る宮殿や聖堂などは、とても素晴らしかった。市内観光後の「ネヴァ川の運河クルーズ」は、サンクトペテルブルグ観光の総まとめとして、お勧めしたい。

歴史の変遷と共に、街の名前も、サンクトペテルブルグから、ペトログラード、レニングラード、そして再びサンクトペテルブルグへと、移り変わっている。

ネヴァ川から見たエルミタージュ美術館

エルミタージュ美術館の内部

(2)　エルミタージュ美術館　（世界四大美術館の１つ）

ロマノフ朝の財宝とソ連誕生後に国有化されたコレクションで、紀元前４０００年の古代エジプトのコレクションから、ヨーロッパ２０世紀のマティスやピカソなどの巨匠まで、約３００万点。観賞の時間はいくらあっても足りないだが、我々には、現地ガイドが案内しくれる絵画と宮殿装飾

などで充分だ。疲れた・・・。

素晴らしいのは、コレクションだけではなく、ロシア皇帝の住まいだった宮殿もである。各部屋はきらびやかで重厚そのものだ。ロシア帝国の繁栄を示す豪華絢爛な宮殿は、当時のヨーロッパの最高の技術者たちによって造られたという。

(3)　エルミタージュ劇場にて本場のバレエ

ロシアで本場のバレエが見たいと、特別に添乗員にお願いしてチャンスをつくってもらった。最も有名なバレエは、ボリショイとマリインスキーであるが、これらは前もっての予約が必要で、その場で観賞できるわけがない。それでも、エルミタージュ劇場でバレエ「ジゼル」を観ることができた。エルミタージュ劇場は、かつての貴族の為だけに作った小規模な劇場で豪華な雰囲気で、手を取るような近くで見ることができた。終了したのは夜１１時、劇場の外にでたら、まだ太陽が輝いており、白夜を実感した。

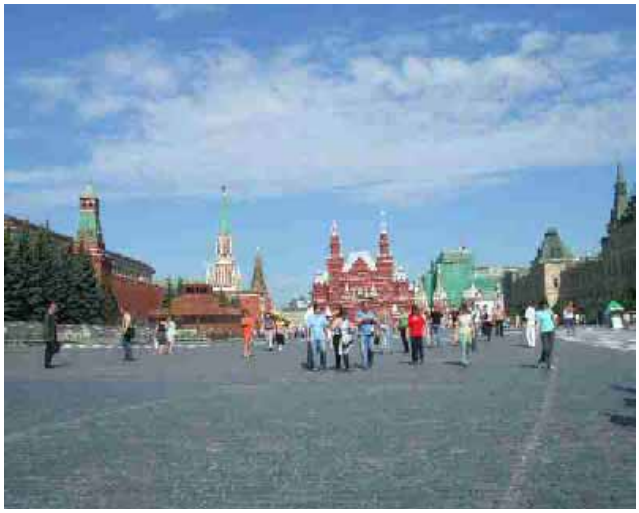
バレエ「ジゼル」

(4)　モスクワの赤の広場

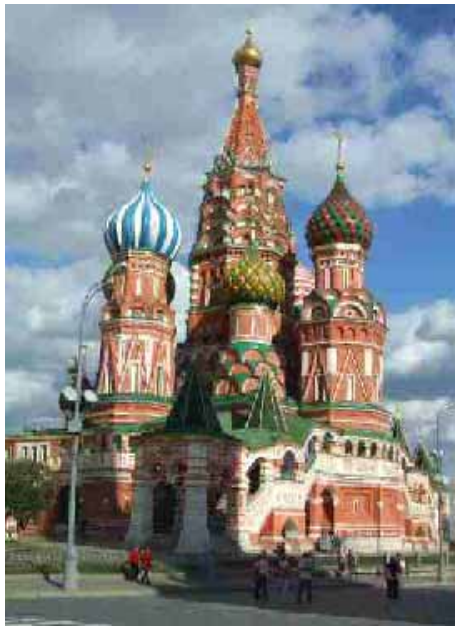
冷戦時代にはモスクワは敵国の首都といわれ、モスクワは遠い存在であった。モスクワの赤の広場やクレムリンでは、歴史が繰り広げられ場所で、テレビのニュースなどで見た場所である。自分の足で赤の広場に立ったとき、２０年前～１５年前のテレビや新聞のニュースで見聞きしたことが頭に浮かび、感慨無量であった。

赤の広場の「赤」は、社会主義を連想していたが、古代スラブ語では「美しい」という意味だそうで、「美しき広場」とのことだ。

赤の広場は、今は多くの観光客でいっぱいであるが、農民の首謀者などが処刑されたり、ナポレオン軍がやってきたり、革命軍（赤軍）と反革命勢力（白軍）の闘争が繰り広げられたりで、多くの歴史・ロシア変動の舞台となった場所である。



赤の広場



聖ワシリー聖堂

赤の広場で、最も目を引くのは聖ワリシー聖堂で、葱坊主のような、又はソフトクリームのような形をしたドーム（屋根）である。これは「炎（ほのお）」を示しているそうだが、写真をみるとその奇抜さが分る。

(5)　クレムリン

クレムリンは赤い城壁、黄金の屋根（ロシア正教の教会の屋根）に特徴があり、モスクワ川のクルーズから観光は最高だった。

クレムリンは、歴代の皇帝の権力の中枢で、ロシア正教の中心地であった。プーチン大統領時代になっても、今でも国の中核である。大統領府の近くには、プーチン大統領の乗用車が置かれていた。この巨大国家の象徴がモスクワ最大の観光名所になっており、歴史の舞台を自分の目で見ることは、やはり感激であった。

モスクワ川クルーズから見たクレムリン

赤い城壁（2235m）に囲まれた内部（総面積は 28 万㎡）には、大統領府や美しい聖堂、武器庫（博物館）、ウスペンスキー大聖堂、クレムリン宮殿、鐘の皇帝、大砲の皇帝など見所も多い。

４、ロシアはどんな国？

レーニンやスターンの社会主義制度のイメージは大きいが、たった 20 年ぐらい前から、ロシアの大改革が非常に速いスピードで進んでいる。いろんな弊害も起こしている。最後の日のバスの中で説明をしてくれた現地ガイドの話も混ぜながら、まとめてみた。

(1)　1986 年、ゴルバチョフがソ連の政権（書記長）の座について、すぐ(1986.6）画期的な**ペレストロイカ路線**を打ち出した。

ペレストロイカでは、政治、文化、対外政策の面での民主化と自由化、そして軍縮と緊張緩和を進め、冷戦に終止符を打った。しかし、民族紛争と独立運動などが燃え上がった。結果的に、ゴルバチョフの意に反して、1991 年の、社会主義制度のソ連邦の崩壊につながった。

(2)　1991 年 6 月、ロシア大統領にエリツィン

一方、ロシア史上初の国民投票で、**ロシア大統領に選出されたエリツィン**は、市場経済に大きく変換していった。しかし経済問題や民族紛争などで、ソ連邦のゴルバチョフ書記長との対立が大きくなった。

(3)　199１年 12 月、ソ連邦は崩壊し、ロシア建国

ソ連邦に替わって、12 の共和国からなる独立国家共同体へ再編されたが、形骸化している。急速な市場経済化が混乱をさらに拡大し、一層の経済危機を深め、エリツィンは大きな歴史変動の中で 1,999 年 12 月に引退。

(4)　2000 年 3 月、プーチン大統領に

エリツィン政権は野党が多く苦戦したが、2000 年からは石油資源も含め景気は向上に向かいプーチン政権は今も安定している。

ソ連崩壊後の混乱で、超大国の地位を失っていたが、主力輸出品の石油や天然ガスの高値による経済成長で、急激に国力を回復している。そして対外政策での主張を強めて、アメリカの一極支配を牽制し始めている。ごく最近では、ミサイル防衛などをめぐって米欧との対立を深めており、「新冷戦」とも呼ばれる状態になりつつある。アメリカの一極支配は困るが、経済の国家管理や民主化の後退などで先鋭化するロシアには、危険も感じる。

現地日系ガイドでさえ、「アメリカはロシアの石油を狙っている。」と敵対意識のハッキリ表したのには驚いた。

これら社会主義制度からの大変革が、なんと、直近の、たった 20 年間で行われてきたことは、本当に驚異的だと思う。我々の年代では、ほんのちょっと前に、新聞やテレビのニュースで見聞きした歴史でもある。

(5)　国民生活

一方、ロシアの国民生活はこの急速な変化についていけてないと言う。貧富の差は大きくなってきた。貨幣価値が大幅に下がり、今までの年金では全く生活できないという。それまで国から提供されていた住宅や別荘は無料で払い下げられた。しかし、それ以降の若い人は自分で購入しなければならなくなり、家の購入もなかなか難しい。国営の会社は、それまでの国の上位層や、特定の一握りの人たちに安く払い下げられ、さらに富裕層を作った。最近では、海外からの参入企業で働く新ロシア人、すなわち給与など一般の企業給与に比べ数段多くをもらっているバリバリの若者達も出てきている。しかし、ほとんどの市民の給料は少なく、1 つの仕事だけでは生活できず、幾つかの仕事をこなしている人も多いそうだ。現地ガイドが、最近、市民の間で言われていることを紹介してくれた。即ち、「食べるためには多くの仕事をしなければならない。多くの仕事をすると、食べる時間もなくなる。」と。

(6)　北方領土問題は？

ロシア旅行の前に、友人 H さんから「ロシアの人は北方領土をどのように思っているのだろうか。早く返還してもらいたい。」と投げかけられていた。そんなことは分る訳がないが、現地ガイドは、「北方領土は戦争の結果である。返還反対しているのは、軍人、現地住民、そして漁業関係者である。しかも、もし、返還するとアメリカの基地を作る可能性がある。したがってプーチンは絶対に返還しないだろう。」と、はっきり言った。

以上